

プラスチック資源の地域コミュニティ回収に関する 実証実験報告書

2025年2月

生活に欠かせないプラスチックとその課題

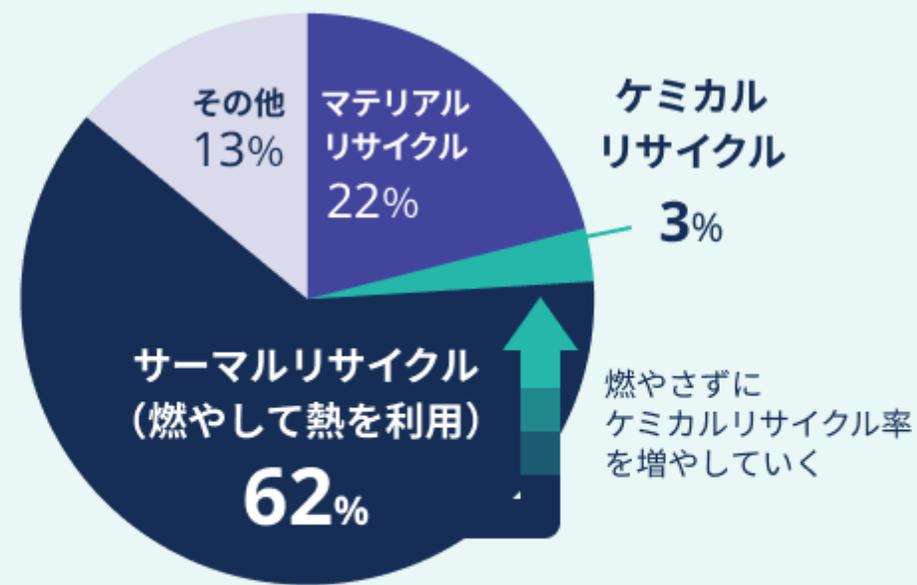
プラスチックは私たちの身の回りのいたるところで使われていて、例えば、食品容器では、食品を衛生的に保管し、長持ちさせること等に役立っています。しかし、主に石油から作られるプラスチックは、燃やすと地球温暖化の原因となる二酸化炭素(CO₂)が発生します。また、一部が不適切な処理により海洋プラスチック汚染の原因となっていることなど、社会課題となっていることも事実です。

“「すてる」をなくす、「みらい」をつくる。”企業の連合隊

アールプラスジャパンは“「すてる」をなくす、「みらい」をつくる。”という理念のもとに集まった企業の連合隊です。「貴重な資源であるプラスチックが、永遠に循環しつづける社会をつくりたい」との共通の思いを持った44社が参画しています。多様な価値を持つ仲間が、自ら知恵を出し合い、新たな常識をつくる。私たちはリサイクルのしくみづくりや新技術の実用化に取り組んでいます。

新技術でプラスチックを 燃やさずにリサイクルする

国内におけるプラスチックごみ（廃プラスチック）の総量は年間約823万トン。このうち、有効利用率は全体の87%と、諸外国に比べても高いレベルにあります。しかし、全体の約62%は燃やしてその熱を利用（サーマルリサイクル）していることも事実です。アールプラスジャパンは新技術により、これらを燃やさずにリサイクルすることを目指します。



日本のプラスチックごみの処理状況2022年データ
(出典：プラスチック循環利用協会2022レポート)

いま、できることからリサイクルのしくみづくりに挑戦

アールプラスジャパンが実用化を目指す新技術では、さまざまな種類のプラスチックを燃やさずに、もう一度プラスチックに再生することができます。しかし、その実用化はまだ少し先の未来。

今回は、今ある技術でもリサイクルしやすいポリスチレンという種類のプラスチックが主に使われる容器を集めます。

Executive Summary

1. 実証実験の概要
2. 回収後の展開検査
3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）
4. 今回明らかになったこと及び今後の課題

Executive Summary

1. 実証実験の概要
2. 回収後の展開検査
3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）
4. 今回明らかになったこと及び今後の課題

- (株)アールプラスジャパンは国立市および国立市社会福祉協議会と締結した包括連携協定に基づき、持続可能な循環型社会の実現に資するとともに、環境保全の意欲増進、環境教育の推進、地域コミュニティの活性化および地域福祉の向上を図ることを目的に、プラスチック資源の自主回収テストを実施した。
- 回収対象は(株) Mizkan、リスパック(株)、(株)ヤクルト本社がそれぞれ製造・販売した食品の容器(納豆容器、弁当容器のフタ、乳酸菌飲料容器)とし、1日限りの回収イベントを3回実施した。
- その結果、回収量は回を追うごとに約4kg、約9kg、約12kgと増えた一方で、異物(対象外物)混入率は1%未満の低い水準のなかで、より低下していく傾向であった。また、3回目の回収テストでは、1日限りの回収イベントの翌日から、1か月間にわたる継続回収も行った結果、回収量は1日限りの回収イベントより多い約15kgを回収したが、1日限りの回収イベントより異物混入率が高まる傾向であった。
- なお、特に弁当のフタに関しては、回収対象物の中でも、複数種類のプラスチック素材(PS、PP、PET)のものが混合して回収され、このことは、様々な種類のプラスチックが混合した状態での処理が可能な、(株)アールプラスジャパンが稼働を目指す新技術によるリサイクルの重要性を示す結果とも言える。
- さらに、市民向けのアンケート調査も実施した結果、プラスチックごみ問題に対する関心は高く、普段から分別回収をきちんと行っていることが示唆された。容器回収における課題としては、回収場所までの距離、保管スペース、家族がごみと間違えること、洗浄・乾燥等が挙げられ、また、回収への協力意欲を高めるには、リサイクル結果の報告やポイント還元等が有効であることが示唆された。さらに、日常よく購入する食品について、リサイクル容器への変更に伴う値上げを受容するとの回答は約26%であった。
- 今後、より長期的な回収テストを行う場合、回収側の視点では異物混入対策を進めるとともに、消費者側の視点では回収の利便性向上、インセンティブ付与を行っていく必要がある。あわせて、継続・拡大可能な取組とするため、最終製品への価格転嫁も視野に、経済合理性を確保していくことも重要である。

Executive Summary

1. 実証実験の概要

2. 回収後の展開検査

3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）

4. 今回明らかになったこと及び今後の課題

- 実証実験の目的
- 実証実験のゴール
- 関係者の役割
- 本取り組みの流れ
- 啓蒙の取り組み

将来を担い 未来を生きる、次の世代である子どもたちのために、
国立市とアールプラスジャパンの連携により、相乗効果を創出して、
福祉・教育の向上と プラスチック資源循環を図る、「国立モデル」を構築。



国立市循環型社会形成推進基本計画

一人ひとりのごみを出す量が、多摩地域で最も少ない
「多摩地域のトップランナー」を目指す。

第三次国立市子ども総合計画

子どもと家族と地域が輝き未来へつながるまち
～いきいき子育て・わくわく子育て～



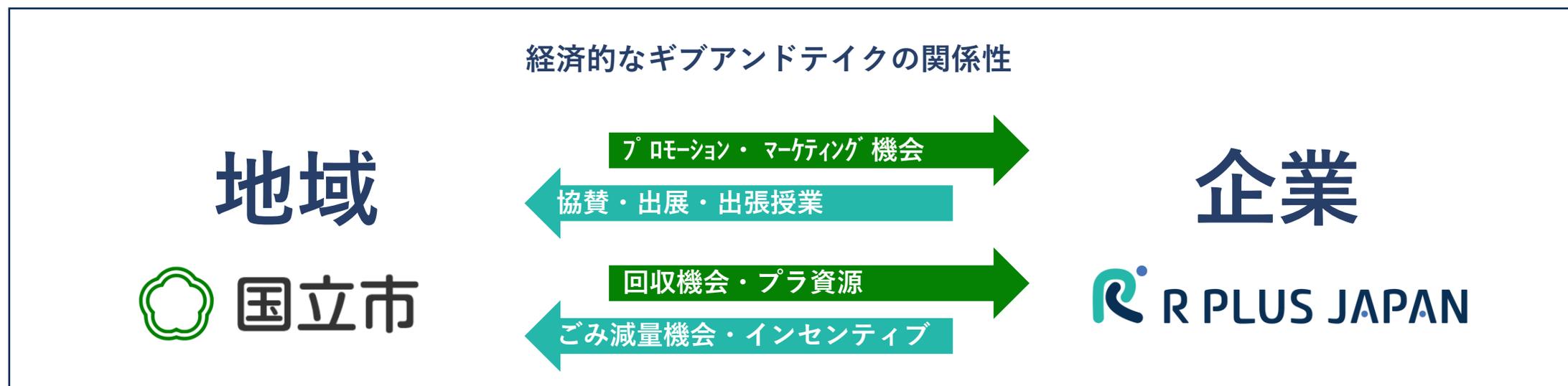
“「すてる」をなくす、「未来」をつくる。”企業の連合隊

「貴重な資源であるプラスチックが、永遠に循環しつづける
社会をつくりたい」との共通の思いを持った企業の連合隊。

(株)アールプラスジャパンは国立市および国立市社会福祉協議会との協定に基づき本実証実験に取り組んだ。地域コミュニティの1つである「こども食堂」の協力を得て、告知イベントの実施や、隣接する場所でのプラスチック資源の回収イベント等を行った。

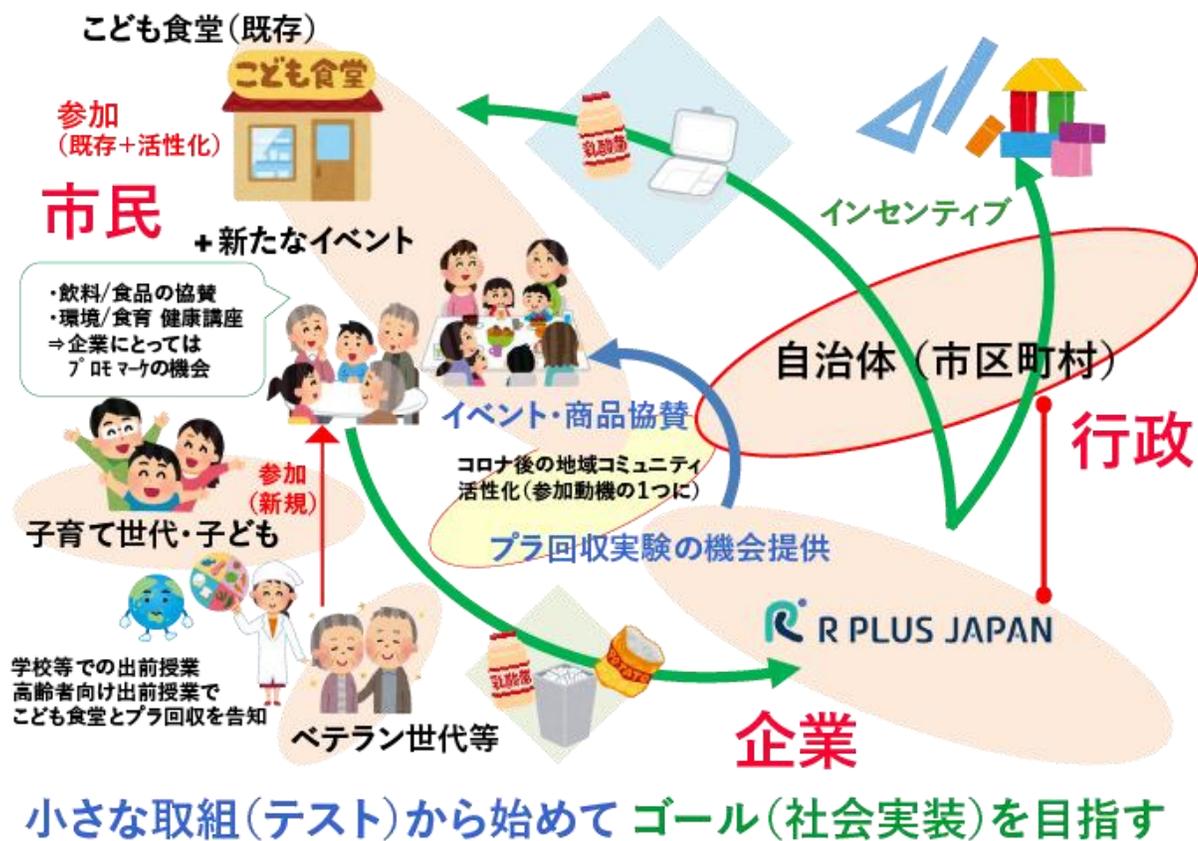
社会実装に向け目指すゴール

- 地域のごみ減量 とアールプラスジャパンとしてのプラ資源確保 に繋がる取組となる。
- 広く地域の福祉や教育の向上に資する取組となる。
(特に子どもや子育て世代のために役立つことを重視)
- 地域と企業の双方が経済的なメリット※を得られ、息切れすることなく自然と取組が拡大・継続できる仕組みとなる。 ※インセンティブ獲得、財政負担軽減、収益化など



関係者の役割

国立市と企業連合体であるアールプラスジャパンがそれぞれ役割を担いながら、小さな取組(テスト)から初めてゴール(社会実装)を目指す。



R P J 参画企業

本取組の協力企業

プラットフォーム： (株)アールプラスジャパン プラ循環スキーム構築分科会 学校・地域コミュニティ回収チーム		
(株)ヤクルト本社	人も地球も健康に Yakult	実施主体/ブランド オーナー
(株)Mizkan	mizkan やがて、いのちが変わるもの。	ブランドオーナー
リスパック(株)	リスパック株式会社	容器メーカー
三友プラントサー ビス(株)	PLANT SERVICE	アールプラスジャ パンWT リーダー/ アドバイザー
CBC(株)	CBC GROUP	スキーム構築/コー ディネート
佐川急便(株)	SgH SAGAWA	収集/運搬
(株)DATAFLUCT	DATAFLUCT	データ処理/事業化 構想
PSジャパン(株)	PS Japan	回収容器再資源化 (再生PS製造)

本実証実験における回収容器の流れ



プラ使用
製品の消費

市民の
協力で
回収

使用済み
プラ(資源)
回収

運搬

展開検査
(良品選別)

運搬

中間処理
(破碎洗浄)

運搬

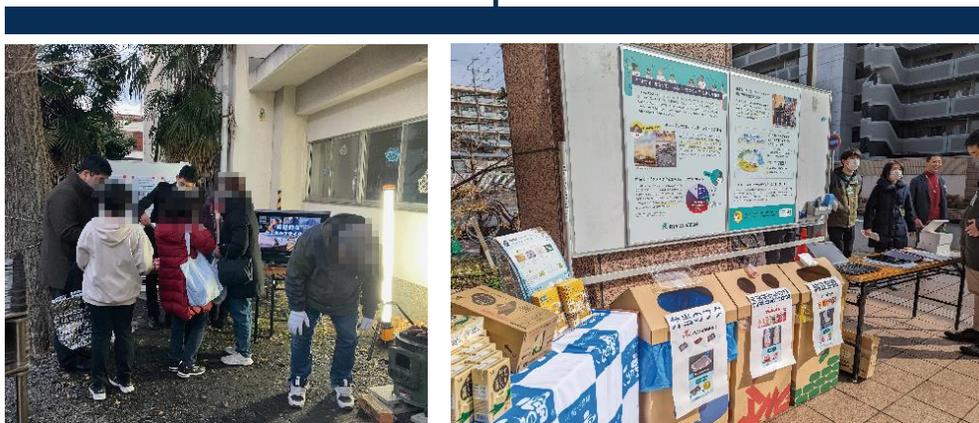
再資源化

市民による
製品の消費

国立市、くにたち
社協と連携し、
「こども食堂」の
協力のもと
RPJによる
プラ回収イベント

RPJによる
展開検査・計測

※くにたち社協：国立市社会福祉協議会
RPJ：アールプラスジャパン



啓蒙の取り組み

勉強会の開催や、チラシやポスターなどに掲載する内容を工夫して協力者への啓蒙活動を行った

勉強会では講演とポスターセッションを実施

イベント告知に合わせ、異物混入を防ぐための具体的な例示や、取組背景の説明をチラシ等で実施した



実証実験のためのプラスチック容器回収

食品容器リサイクルへの協力をお願い

9月4日(水) 10:00~18:00

回収場所 くにたち福祉会館(富士見台2-38-5)

午前中は勉強会を開催します!

- 国立市のごみの現状と循環型社会形成に向けての取り組み紹介
- 各企業の環境やサステナビリティの取り組み紹介 (サントリー/ミズカン/リスパック/ヤクルト)

下記容器を当日集めます、ご協力お願いします
さらに、1ヶ月間(9/4(水)~10/4(金))回収ボックスの常設もいたします!

1 納豆容器

mizkan

2 乳酸菌飲料容器

Yakult

3 弁当のフタ

リスパック株式会社

① 洗って、乾かして、持ってきてください

納豆容器は10分程、水につけるとプラスチックが取れやすい

集めるのは透明なフタだけ

入れないで!!

タレ袋など

入れないで!!

タレのフィルム

入れないで!!

フタ

入れないで!!

PETボトル

入れないで!!

容器本体

できるだけはがして!

シールが多いもの

国立市 くにたち社協

協力企業

これは、アールプラスジャパンによる、国産食品の回収活動協賛会との包括連携協定に基づく取組です。東京ヤクルト本社、株式会社ミズカン、株式会社リスパックが、アールプラスジャパンの参加企業として協賛・取組んでいます。

生活に欠かせないプラスチックとその課題

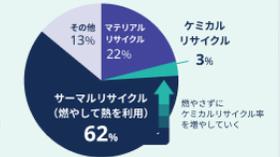
プラスチックは私たちの身の回りのいたるところで使われていて、例えば、食品容器では、食品を衛生的に保管し、長持ちさせること等に役立っています。しかし、主に石油から作られるプラスチックは、燃やすと地球温暖化の原因となる二酸化炭素(CO₂)が発生します。また、一部が不適切な処理により海洋プラスチック汚染の原因となっていることなど、社会課題となっていることも事実です。

「『すてる』をなくす、「みらい」をつくる。」企業の連合隊

アールプラスジャパンは「『すてる』をなくす、「みらい」をつくる。」という理念のもとに集まった企業の連合隊です。「貴重な資源であるプラスチックが、永遠に循環しつづける社会をつくりたい」との共通の思いを持った44社が参加しています。多様な価値を持つ仲間が、自ら知恵を出し合い、新たな常識をつくる。私たちはリサイクルのしくみづくりや新技術の実用化に取り組んでいます。

新技術でプラスチックを燃やせずにリサイクルする

国内におけるプラスチックごみ(廃プラスチック)の総量は年間約823万トン。このうち、有効利用率は全体の87%と、諸外国に比べても高いレベルにあります。しかし、全体の約62%は燃やしてその熱を利用(サーマルリサイクル)していることも事実です。アールプラスジャパンは新技術により、これらを燃やせずにリサイクルすることを目指します。



いま、できることからリサイクルのしくみづくりに挑戦

アールプラスジャパンが実用化を目指す新技術では、さまざまな種類のプラスチックを燃やせずに、

弁当のフタ

乳酸菌飲料容器

納豆容器

回収ボックスの常設置

回収ボックスを1か月間常設した際にも混入を防ぐための細かい対策を随時実施

Executive Summary

1. 実証実験の背景と目的

2. 回収後の展開検査

3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）

4. 今回明らかになったこと及び今後の課題

- 展開検査 全体
- 展開検査 単回収での異物（例）
- 継続回収での異物（例）
- 継続回収 日ごとの回収数量
- 展開検査のまとめ



展開検査 全体

回収物について、アールプラスジャパンが稼働を目指す新技術で処理可能なプラスチック※が主材であるものを対象物（良品）として集計した結果を以下の通りまとめた。

※ 新技術では様々な種類のプラスチックを処理可能であり、このうち今回回収した容器では主にポリスチレン（PS）が使用されるが、「弁当のフタ」ではポリプロピレン（PP）、ポリエチレンテレフタレート（PET）が使用されるものもある。

【アールプラスジャパン基準】

単位：kg

	回収日	展開検査日	対象物	対象外物	対象外物比率
単回収 1回目	3月6日	3月29日	4.21 (内PS樹脂3.52)	0.03	0.7%
単回収 2回目	6月5日	6月14日	9.26 (内PS樹脂7.71)	0.03	0.3%
単回収 3回目	9月4日	10月11日	11.46 (内PS樹脂9.89)	0.04	0.3%
継続回収	9月5日～ 10月4日		15.11 (内PS樹脂11.72)	0.34	2.2%
合計			40.04 (内PS樹脂32.84)	0.44	1.1%

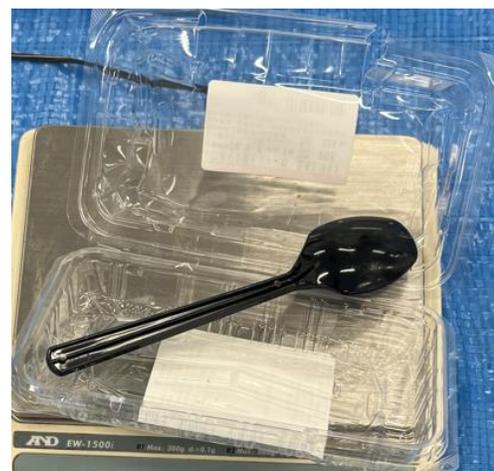
展開検査 単回収での異物（例）

各容器において異物の混入は少なかった（1%未満）が、対象物に付随するフィルムやキャップ、ラベル等の分別残りが見られ、これらをどこまで許容するかを検討が今後の課題として挙げられた（今回はリサイクル原料として投入した際の収率や設備への影響等の観点から個別に良否を評価した）。



展開検査 継続回収での異物（例）

継続回収では、1日限りのイベント回収と比べて混入する異物の種類や量が多くなった。



継続回収 日ごとの回収数量

単位：g

水曜日は前日が閉館日のためか、乳酸菌飲料容器、弁当フタは回収量が多い傾向がみられた。

また、回収終了直前は回収物が多くなる傾向がみられた。

		納豆容器	乳酸菌飲料容器	弁当のフタ
9月5日	(木)	0	56.2	0
9月6日	(金)	15.3	275.9	104.5
9月7日	(土)	6.6	169.9	97.7
9月8日	(日)	0	0	34.7
9月9日	(月)	44.2	24.7	219.3
9月11日	(水)	20.1	664.1	678.6
9月12日	(木)	19	68.2	10.8
9月13日	(金)	47.2	90.8	53.6
9月14日	(土)	34.1	260.3	0
9月15日	(日)	25.9	37.8	261.4
9月18日	(水)	33.1	341.7	344.7
9月19日	(木)	76.1	269.6	217.3
9月20日	(金)	65.3	99.7	193.8
9月21日	(土)	61.2	313.2	0
9月22日	(日)	35.5	75.2	104.5
9月25日	(水)	54.7	318.8	188.8
9月26日	(木)	84	118.6	147.4
9月27日	(金)	156.9	165.8	497.3
9月28日	(土)	49.7	0	55.1
9月29日	(日)	29.5	1000.4	79.4
9月30日	(月)	165.7	240.6	63.6
10月2日	(水)	256.1	557.3	223.8
10月3日	(木)	281.8	1302.9	764.1
10月4日	(金)	329.7	1521.5	1198.1

※各容器ごとの日ごとの平均数量を超えている日はオレンジ色

- 単回収での回収量について、約4 kg、約9 kg、約12 kgと回を追うごとに増えていった。
- 内訳として、対象外物比率は1%未満を維持し、リサイクル可能な対象物の回収量が増えた。
- 1か月間の継続回収は、回収量、PSの数量ともに単回収で最も多かった3回目以上に回収することが出来た。
- 継続回収でも、洗浄・分別をして回収ボックスに入れていただいた容器が大半であったものの、異物について、単回収に比べ様々なものが入る傾向があった。
- ほとんどの容器が洗浄された状態で持ち込んでいただいたことから、問題となるような臭いの発生は確認されなかった。
- なお、弁当のフタは、回収対象物の中でも、複数種類のプラスチック素材（PS、PP、PET）のものが混合して回収され、このことは、様々な種類のプラスチックが混合した状態での処理が可能な、（株）アールプラスジャパンが稼働を目指す新技術によるリサイクルの重要性を示す結果とも言える。

Executive Summary

1. 実証実験の概要

2. 回収後の展開検査

3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）

4. 今回明らかになったこと及び今後の課題

- 4回のアンケート調査の対象層の概要
- 各回でのアンケート設問項目
- 分析の枠組み
- 分析結果
- アンケート分析のまとめ

食品容器リサイクルご協力に関するアンケートのお願い

プラスチック容器回収の実証実験の一環でアンケート回答にご協力をお願いします。
なお、本アンケートは、6月5日の回収イベントで既に回答して頂いた方は対象外です。
㈱アールプラスジャパンは「「すてる」をなくす、「みらい」をつくる。」という理念のもとに集まった企業の連合隊です。

国立市および国立市社会福祉協議会との包括連携協定に基づく取組として、プラスチック容器の回収およびリサイクルの実証実験を実施しています。

今後、本取組をより良いものにするために、アンケート回答にご協力ください。

toshiaki.otsuka@datafluct.com [アカウントを切り替える](#)

共有なし

* 必須の質問です

あなた自身について教えてください。
ご回答いただいた内容は、プロジェクト主催・協力企業等（※）に共有され、「ポリスチレン製食品容器の水平リサイクルスキームの実証」報告書および㈱DATAFLUCTが行う環境問題領域に関連するプロジェクト等において、加工データを利活用することを想定しています。

なお、設問の中で個人を特定できる情報は取得しておらず、ご回答いただいた内容がそのまま外部へ開示されることはありません。

（※）プロジェクト主催・協力企業等は以下の通りです。
㈱アールプラスジャパン・国立市および国立市社会福祉協議会・㈱ヤクルト本社・㈱Mizkan・リスバック㈱・三友プラントサービス㈱・CBC㈱・PSジャパン㈱・SGムービング㈱・㈱DATAFLUCT 等

Q1. 年齢 *

- ~10代
- 20代
- 30代
- 40代

4回のアンケート調査の対象層の概要

総じて女性層が多く、また70代と30代の回答が多かった。

項目	1回 (2024年3月6日実施時)	2回 (2024年6月5日実施時)	3回 (2024年9月3日実施時)	4回 (2024年10月19日実施)
人数	89名	66名	70名	83名
性別 (無回答除く)	女性83.5%、男性16.5%	女性85.7%、男性14.3%	女性84.8%、男性15.2%	女性63.5%、男性33.8%、その他2.7%
年代	30代と70代が多い	30代と50代が多い	70代が多い	30代、40代、70代～が多い
来訪エリア	富士見台43.8%、谷保14.6%、中10.1%など	富士見台28.8%、谷保13.6%、中及び東各12.1%など	富士見台41.4%、中18.6%、東11.4%など	富士見台32.5%、谷保16.9%、中12.0%など

注：第1回から第3回までは富士見台のくにたち福祉会館で実施、第4回は谷保第四公園で開催された環境フェスタくにたち会場で実施

(参考) 4回のアンケート調査の対象層の性別・年齢別のサンプル数

各回の性別、年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

第1回

	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
男性	0	3	3	1	3	4	14
女性	1	18	16	13	4	19	71
						合計	85

N=89、なお性別または年齢に関する質問への無回答4を含む

第2回

	～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
男性	2	1	1	1	1	1	2	9
女性	2	4	15	8	11	7	7	54
							合計	63

N=66、なお性別または年齢に関する質問への無回答3を含む

第3回

	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
男性	0	0	0	0	2	8	10
女性	1	7	8	6	7	27	56
						合計	66

N=70、なお性別または年齢に関する質問への無回答4を含む

第4回

	～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
男性	3	1	6	8	4	1	2	25
女性	1	1	13	11	5	6	10	47
その他	2	0	0	0	0	0	0	2
							合計	74

N=83、なお性別または年齢に関する質問への無回答9を含む

(参考) 過去4回のアンケート調査の対象層の地域別のサンプル数

各回の地域別のサンプル数は以下のとおりである。

第1回

青柳エリア	石田エリア	泉エリア	北エリア	中エリア	西エリア	東エリア	富士見台エリア	矢川エリア	谷保エリア	回答しない	その他	計
1	0	3	5	9	4	5	39	1	13	2	7	89

N=89

第2回

青柳エリア	石田エリア	泉エリア	北エリア	中エリア	西エリア	東エリア	富士見台エリア	矢川エリア	谷保エリア	回答しない	その他	計
1	0	2	0	7	8	8	19	0	9	4	8	66

N=66

第3回

青柳エリア	石田エリア	泉エリア	北エリア	中エリア	西エリア	東エリア	富士見台エリア	矢川エリア	谷保エリア	回答しない	その他	計
3	0	0	3	13	5	8	29	0	4	0	5	70

N=70

第4回

青柳エリア	石田エリア	泉エリア	北エリア	中エリア	西エリア	東エリア	富士見台エリア	矢川エリア	谷保エリア	回答しない	その他	計
1	0	2	5	10	4	8	27	0	14	4	8	83

N=83

各回でのアンケートの設問項目

プラスチックごみ問題への関心、地域情報の入手媒体、リサイクル・容器回収への協力状況、容器回収における課題点等に関する質問を設定した。

回	設問項目	回	設問項目
第1回 (#1)	<ul style="list-style-type: none">くにたち福祉会館への来訪頻度「おいしいじかん」への来訪頻度「こすもひろば」への来訪頻度国立市内の情報を得ている媒体プラスチックごみによる海洋汚染問題への関心プラスチックごみによる海洋汚染問題に関する知識資源の分別回収やリサイクルに関する協力状況	第4回 (#4)	<ul style="list-style-type: none">国立市内で市が運営する場所によく行く場所国立市内の「子ども食堂」によく行く場所国立市内の「子どもの居場所」によく行く場所国立市内の情報を得ている媒体プラスチックごみによる海洋汚染問題への関心家庭で排出されるプラスチックに関して困っていること使用済みプラスチックの回収拠点として望ましい場所食品の安全・衛生及び食品ロス削減におけるプラスチックの効用に関する認識とその理由リサイクル容器の価格水準に対する受容性
第2回 (#2)	<ul style="list-style-type: none">容器の回収に関する協力状況容器の回収に協力した理由容器の回収の認知のきっかけや媒体		
第3回 (#3)	<ul style="list-style-type: none">容器の回収に積極的に協力したくなるための条件容器回収における課題点容器回収に関するボランティアへの協力意向		

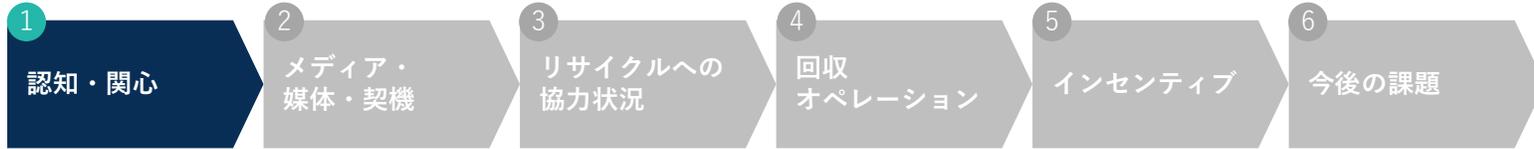
注：以降のアンケート分析の中でSAは単一回答、MAは複数回答を示す
#2と#3は同一内容で実施した

分析の枠組み

環境問題への行動のプロセスを以下の6段階に分けてアンケートの分析を行った。

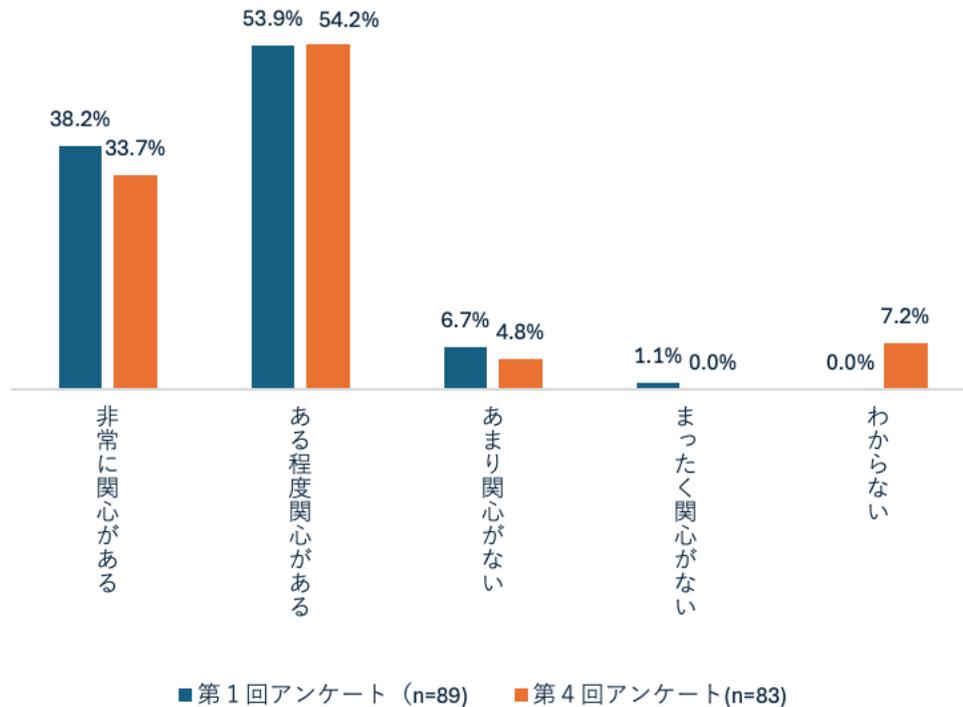


分析結果



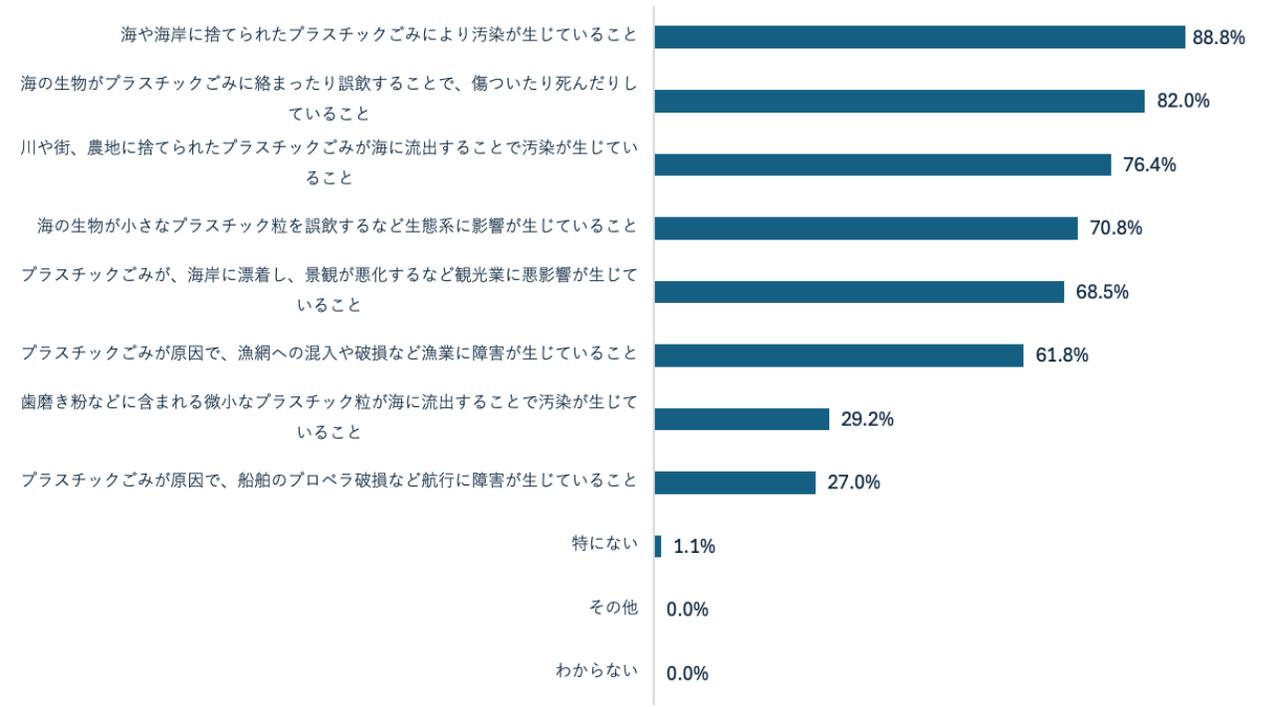
プラスチックごみ問題への関心は「非常に興味がある」と「ある程度興味がある」をあわせると9割に及ぶ。具体的な海洋汚染に関する事象についても生態系への影響を中心に理解は進んでいる。

あなたは、プラスチックごみによる海の汚染などのプラスチックごみ問題に関心がありますか。(SA)



出所：第1回アンケート (n=89)、第4回アンケート (n=83)

あなたは、プラスチックごみによる海の汚染について、どのようなことを知っていますか。(MA)



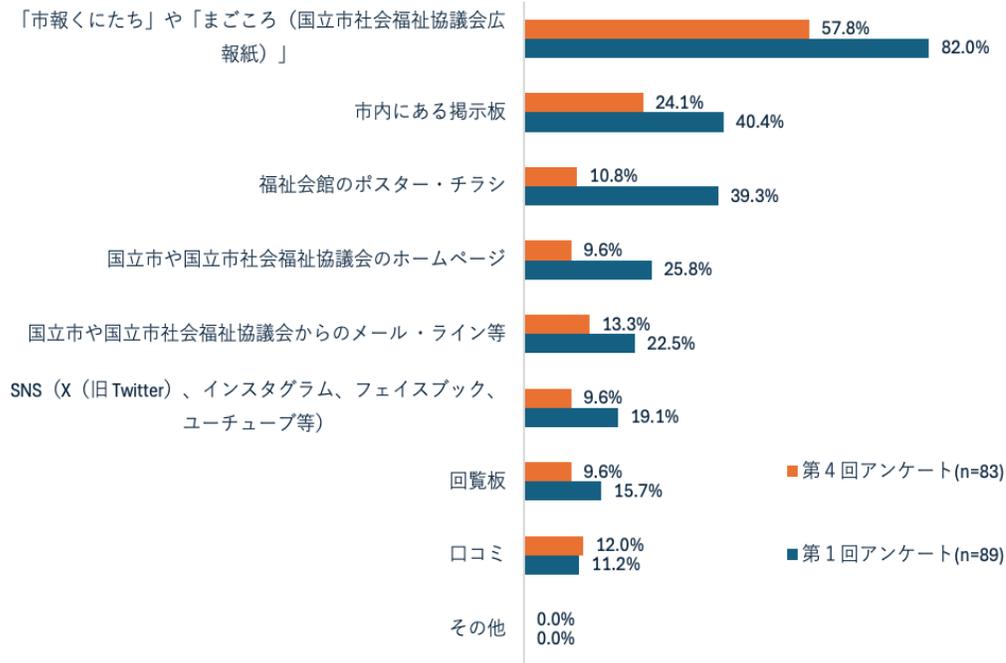
出所：第1回アンケート (n=89)

分析結果



地域情報の入手手段としては市報・広報紙や掲示板といった従来からのメディアが多いが、30～40代を中心にSNSの利用があり、さらに年配層でも市のホームページ、メール等を活用している層がいる。

普段、国立市内の情報を得ている媒体を選んでください。
(MA)



出所：第1回アンケート(n=89)、第4回アンケート(n=83)

普段、国立市内の情報を得ている媒体を選んでください。
(年齢別) (MA)

	n数	「市報くにたち」や「まごころ（国立市社会福祉協議会広報紙）」	回覧板	市内にある掲示板	福祉会館のポスター・チラシ	SNS (X (旧 Twitter)、インスタグラム、フェイスブック、ユーチューブ等)	国立市や国立市社会福祉協議会のホームページ	国立市や国立市社会福祉協議会からのメール・ライン等	口コミ	わからない	その他
～10代	6	33.3%	0.0%	33.3%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%
20代	2	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30代	19	47.4%	5.3%	10.5%	0.0%	15.8%	0.0%	21.1%	5.3%	21.1%	0.0%
40代	20	65.0%	10.0%	30.0%	10.0%	20.0%	5.0%	5.0%	15.0%	10.0%	0.0%
50代	9	44.4%	11.1%	22.2%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	22.2%	0.0%
60代	8	50.0%	25.0%	25.0%	12.5%	0.0%	12.5%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%
70代～	18	77.8%	11.1%	27.8%	27.8%	5.6%	27.8%	16.7%	33.3%	11.1%	0.0%
回答しない	1	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

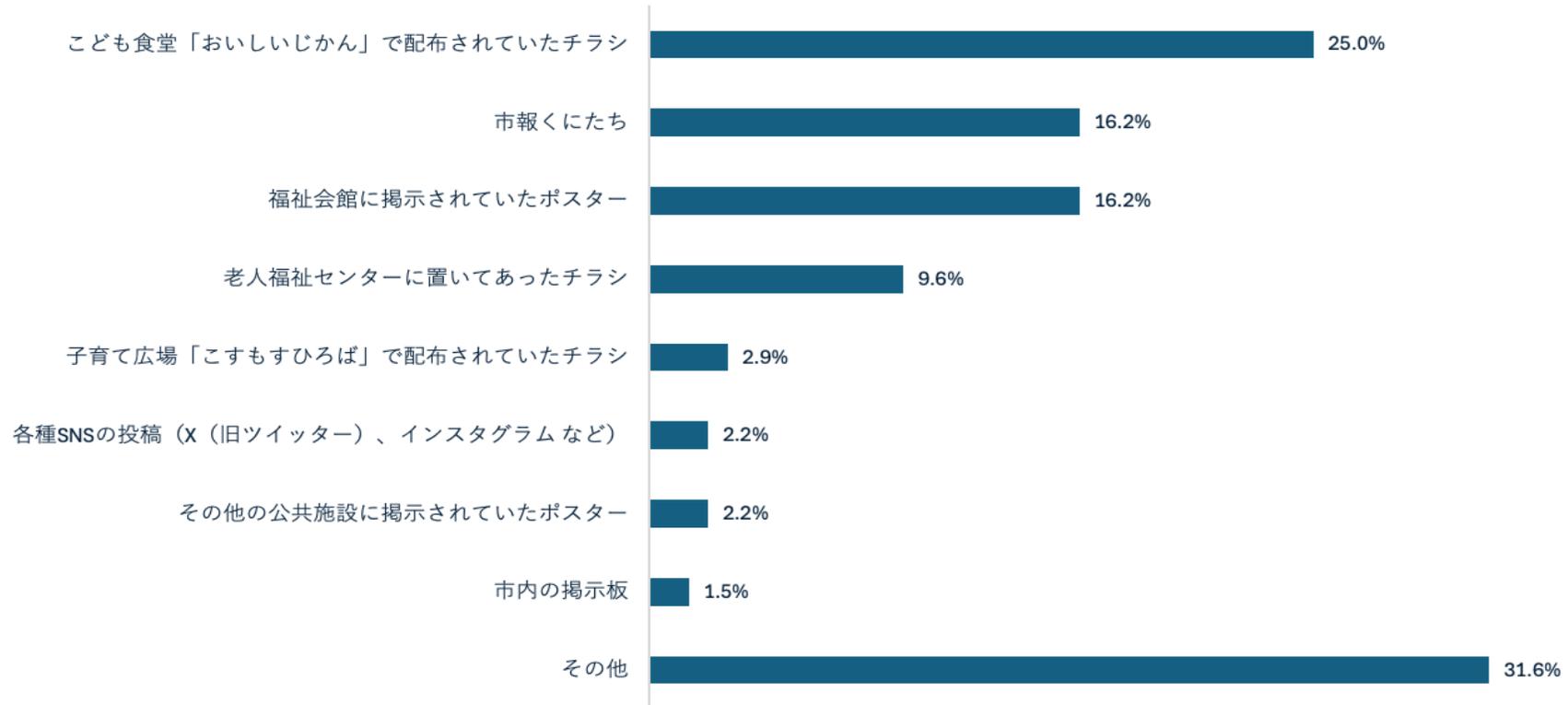
出所：第4回アンケート (n=83)

分析結果



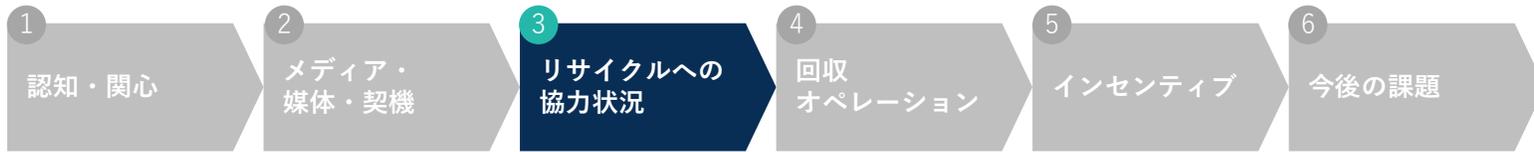
福祉会館で行った回収の際に契機となったのは「子ども食堂『おいしいじかん』で配布されたチラシ」、「市報くにたち」、「福祉会館に掲示されていたポスター」等が上位に来ている。

今回の回収のことを、どこで知りましたか。(MA)



注：「その他」に含まれるのは、通りすがり、自治会・福祉会館のサークル、知人、以前のイベント、職場、ヤクルトレディ、学校教員等である。
出所：第2回アンケート、第3回アンケート(n=136)

分析結果



資源の分別回収やリサイクルに関しては、古布類が7割台とやや低いものの、その他の対象物については9割を超える分別回収やリサイクルを行なっている。

資源の分別回収やリサイクルに協力しているものを選んでください。(MA)

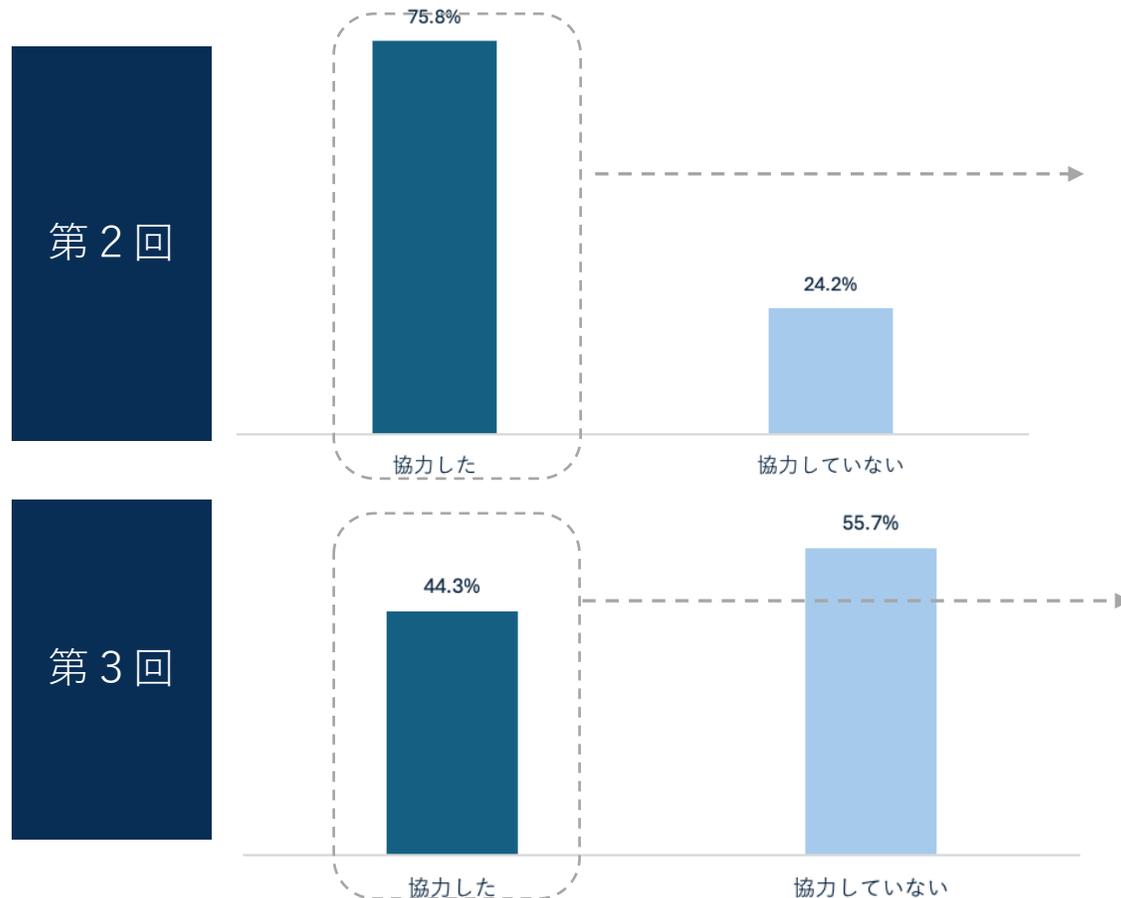


分析結果

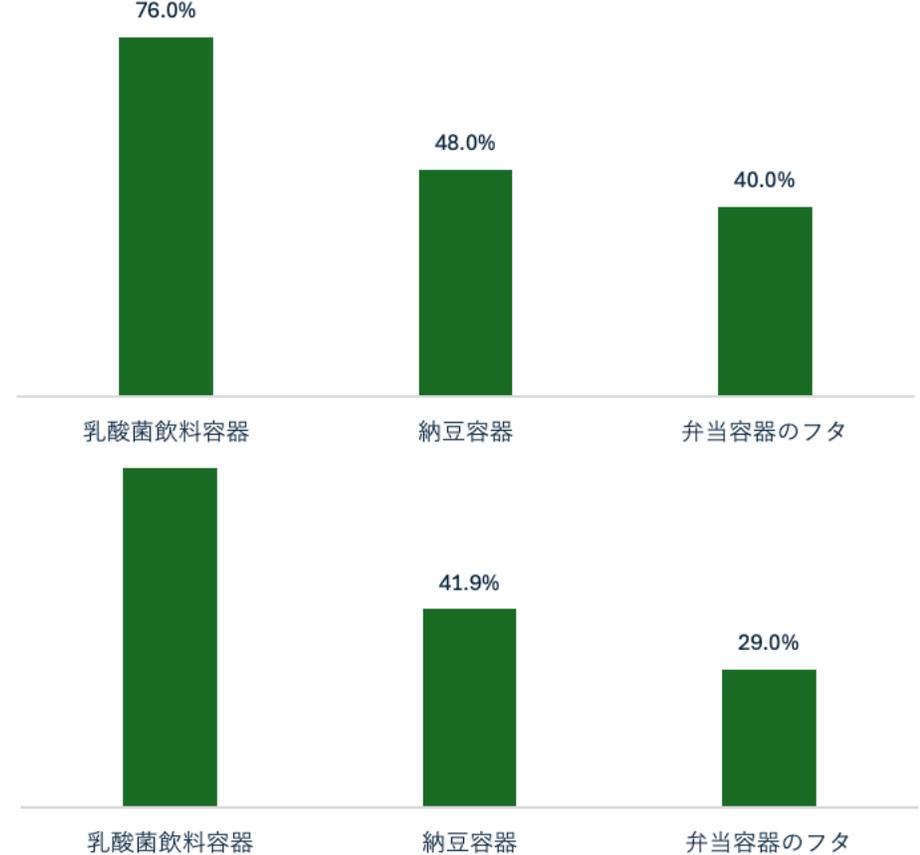


容器回収のリサイクルについては第2回は7割以上、第3回は4割以上がそれぞれ協力している。また各回とも最も協力が多かった容器は乳酸菌飲料容器で、次いで納豆容器となっている。

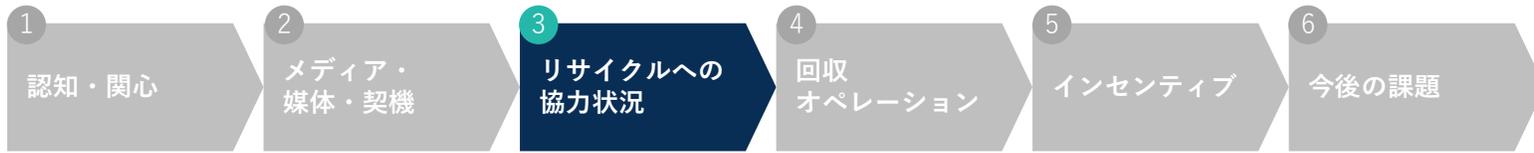
容器の回収にご協力いただきましたか。(SA)



「はい」の方は回収に協力した容器の種類全てにチェックを入れてください。(MA)

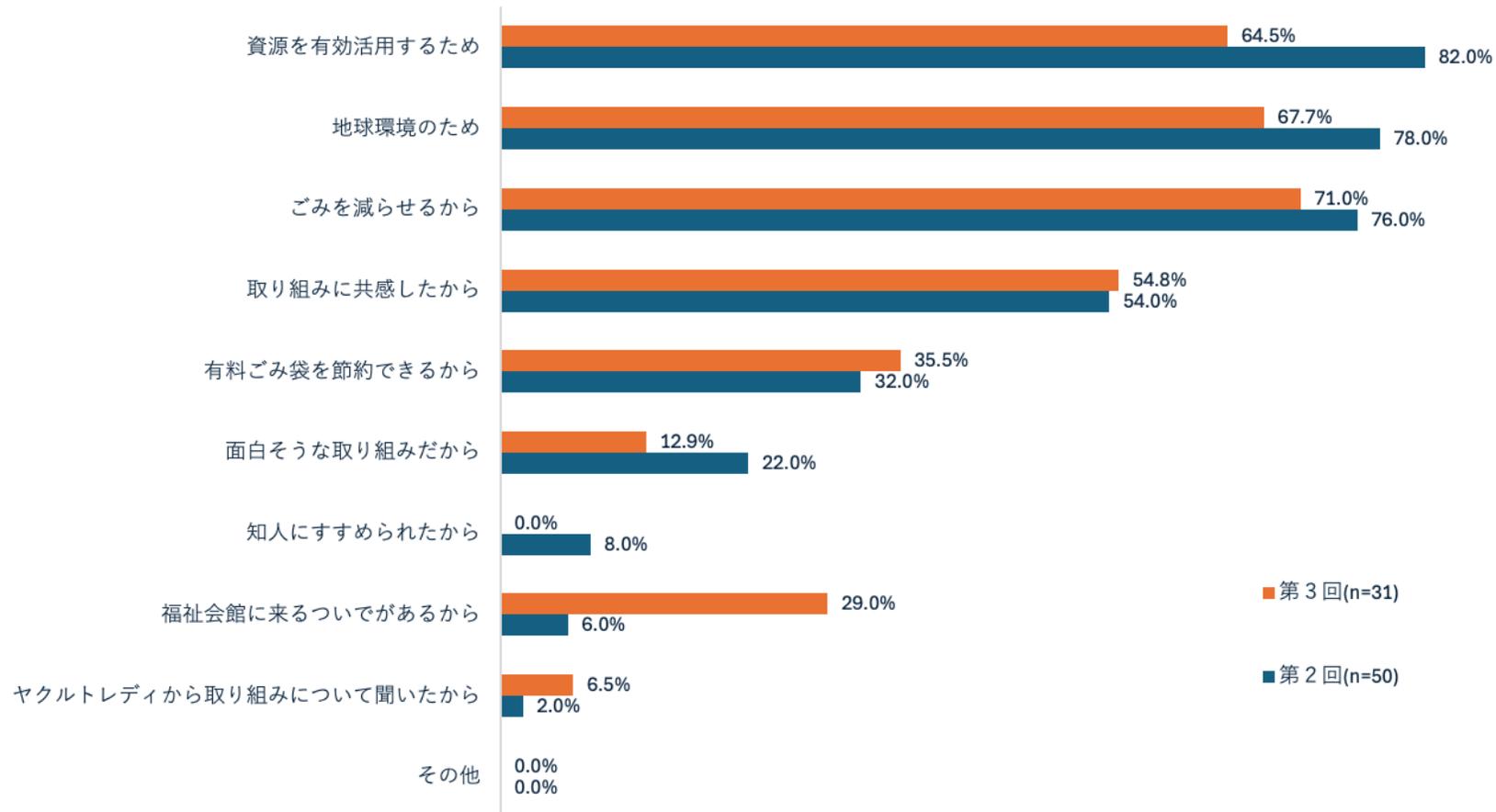


分析結果



リサイクルに協力した理由としては「資源を有効利用するため」、「地球環境のため」、「ごみを減らせるから」が上位に位置付けられている。

回収に協力いただいた理由は何ですか。(MA)



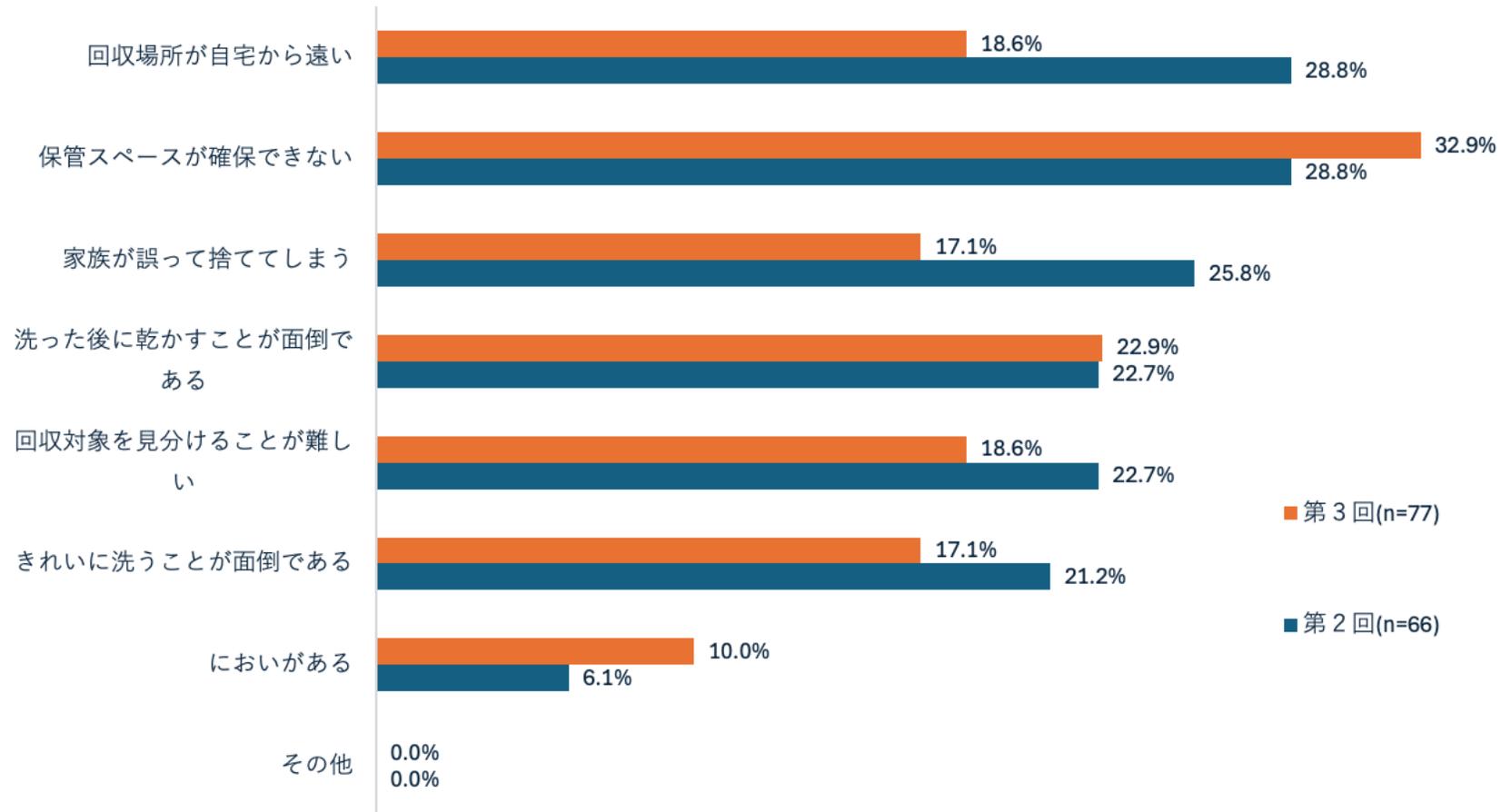
出所：第2回アンケート(n=50)、第3回アンケート(n=31)

分析結果



容器回収における課題としては、回収場所の自宅からの距離、保管スペース、家族の誤認、容器の乾燥等が挙げられている。

容器回収に協力するにあたって、困ったことがあれば教えてください。(MA)



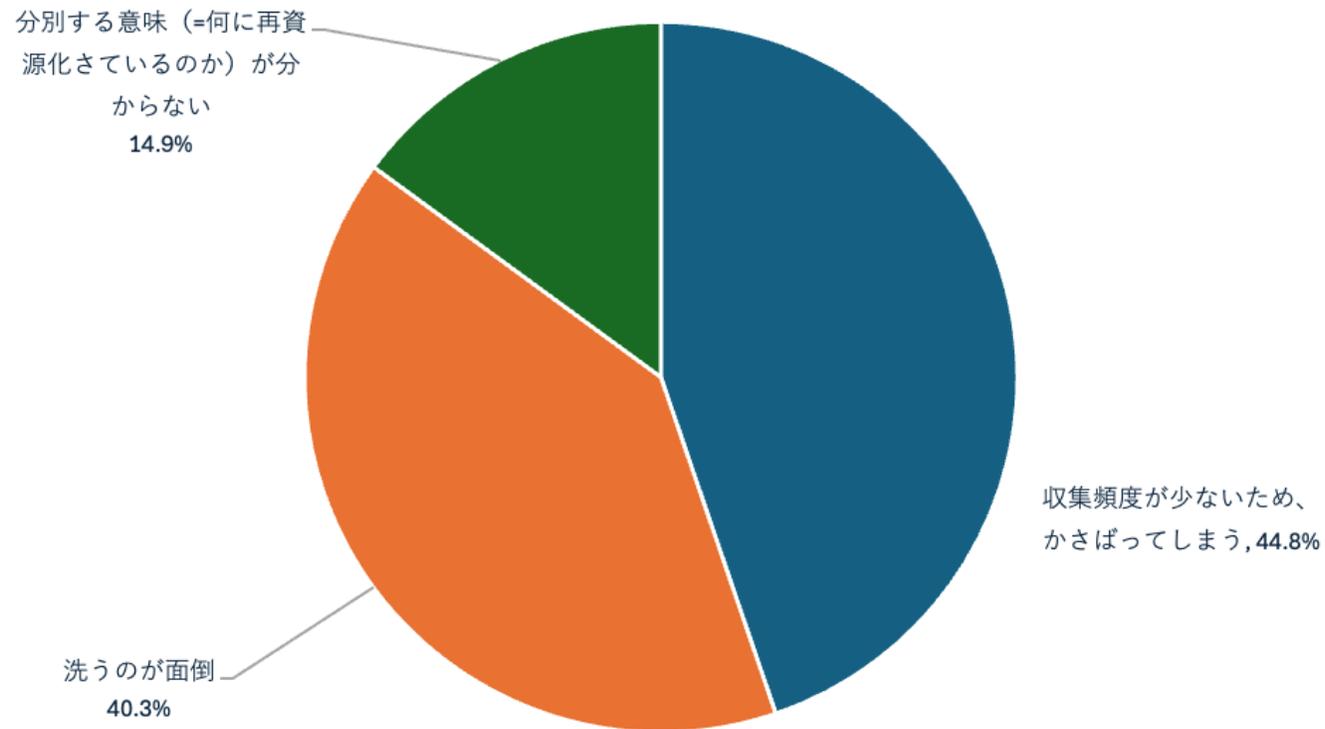
出所：第2回アンケート(n=66)、第3回アンケート(n=77)

分析結果

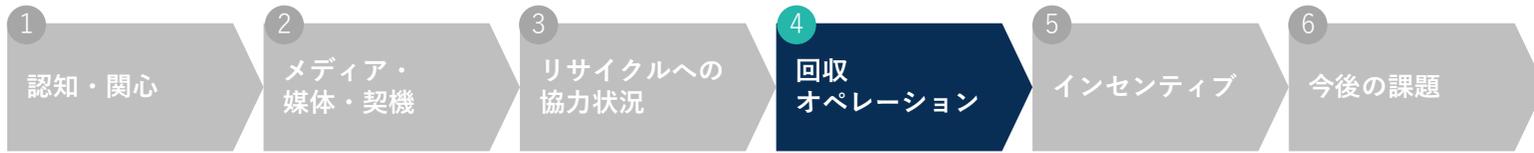


また三択質問の形でプラスチックの廃棄物に関して尋ねたところ、最も多いのが収集頻度の少なさによる嵩張りで、次いで洗うことに伴う面倒さが指摘された。

ご家庭で排出されるプラスチックに関し、何が一番お困りでしょうか。（SA）

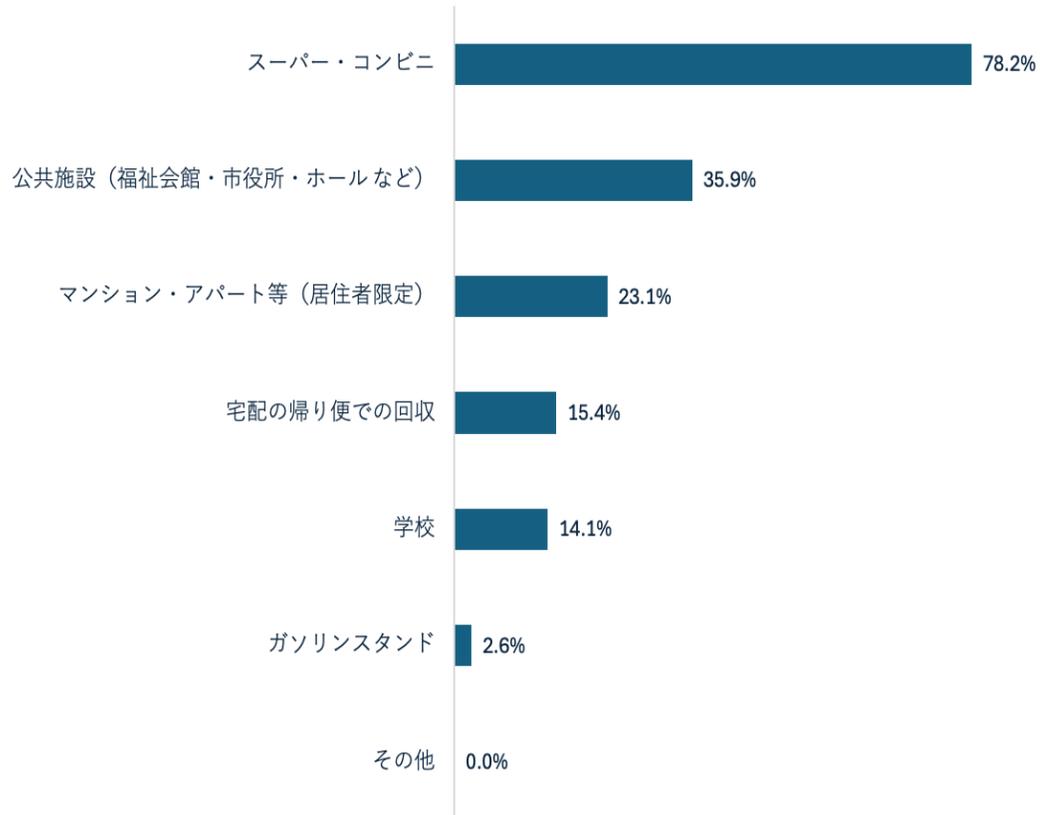


分析結果



使用済みプラスチックの回収拠点としてスーパー・コンビニが圧倒的に支持されており、次いで公共施設が続く。年齢別に見ると若年層中心に宅配の帰り便、学校、マンション等を期待する回答も見られる。

使用済みプラスチックの回収拠点は、どんなところにあるのが良いと思いますか。(MA)



使用済みプラスチックの回収拠点は、どんなところにあるのが良いと思いますか。(年齢別) (MA)

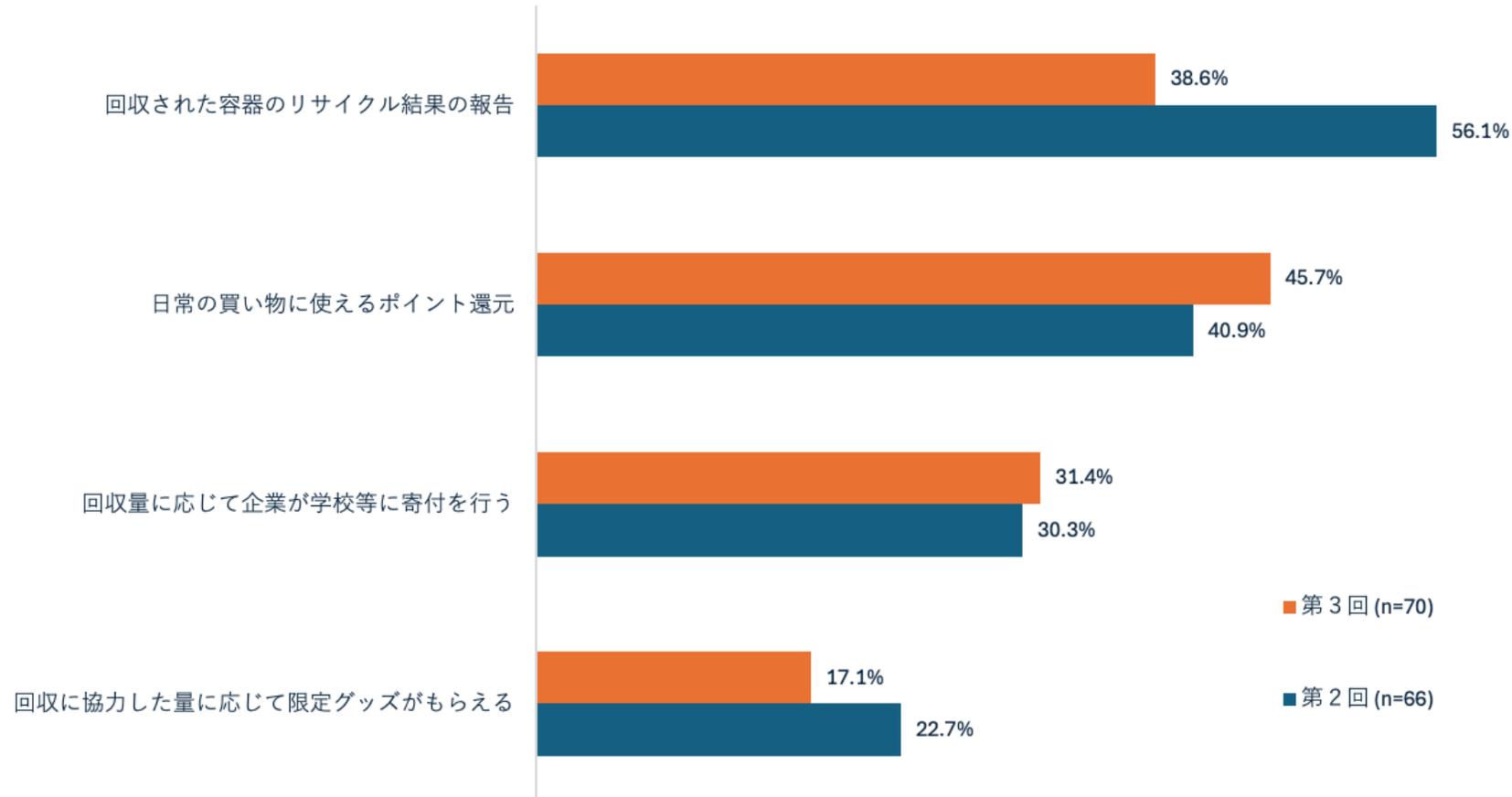
	n数	スーパー・コンビニ	公共施設（福祉会館・市役所・ホールなど）	ガソリンスタンド	宅配の帰り便での回収	学校	マンション・アパート等（居住者限定）	その他
～10代	6	83.3%	66.7%	0.0%	33.3%	50.0%	33.3%	0.0%
20代	2	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%
30代	18	77.8%	33.3%	0.0%	16.7%	22.2%	16.7%	0.0%
40代	18	94.4%	33.3%	0.0%	16.7%	11.1%	22.2%	0.0%
50代	9	77.8%	33.3%	11.1%	22.2%	22.2%	33.3%	0.0%
60代	8	87.5%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%
70代～	17	58.8%	35.3%	5.9%	5.9%	0.0%	17.6%	0.0%

分析結果

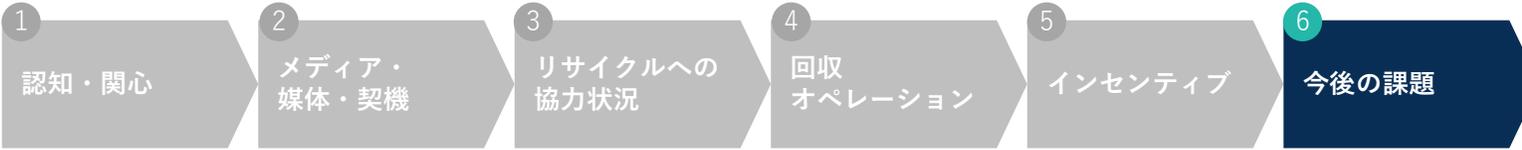


回収のインセンティブとしては、リサイクル結果の報告やポイント還元が上位に位置付けられている。

どんな取り組みがあれば、より積極的に回収に協力したいと思いますか。（MA）

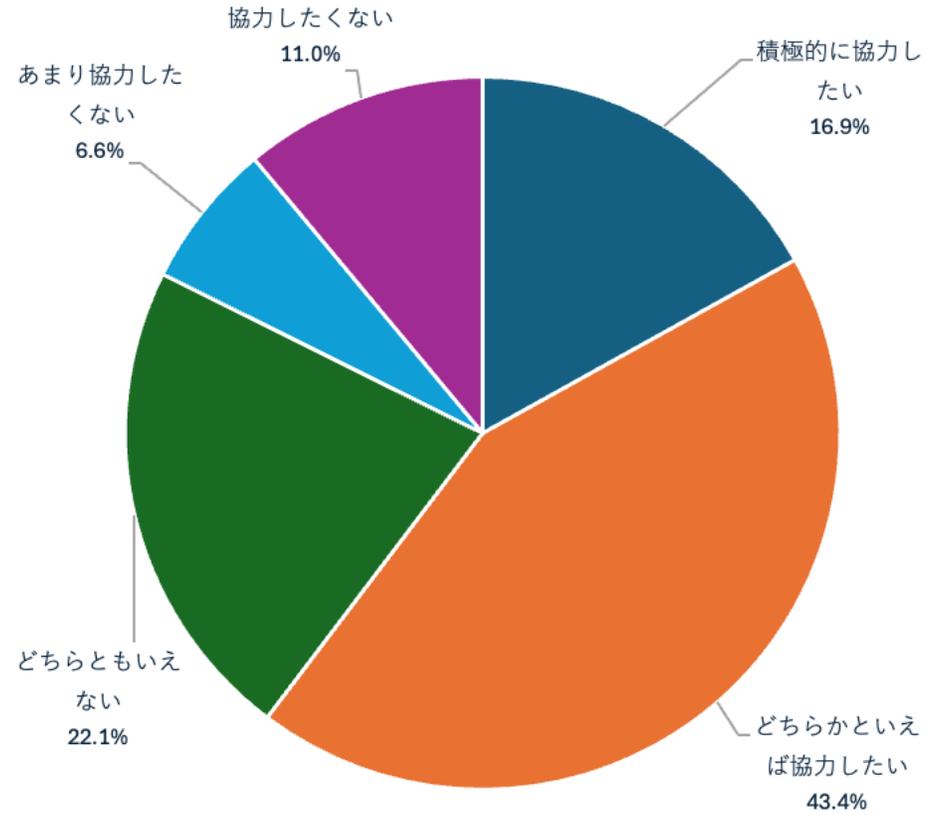


分析結果



容器回収のボランティアに関しては「積極的に協力したい」と「どちらかといえば協力したい」を合わせると6割程度となり、ある程度の協力を見込むことはできそうである。

容器回収に関するボランティアの募集があれば、参加したいと思いますか。(SA)



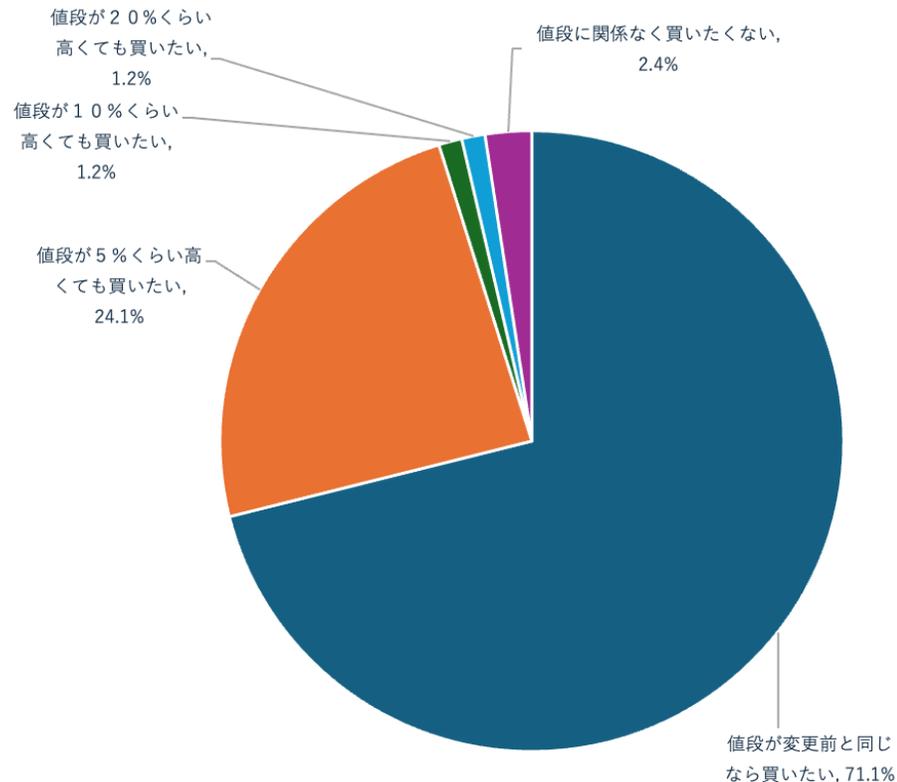
分析結果



日常よく購入する食品について、リサイクル容器への変更に伴う値上げを受容するとの回答は約26%であった。特に若年層やシニア層で値上げは受容される可能性がある。

日常よく購入する食品が、環境にやさしいリサイクル容器に変更された場合、どのくらい買いたと思いますか。(SA)

日常よく購入する食品が、環境にやさしいリサイクル容器に変更された場合、どのくらい買いたと思いますか。(年齢別) (SA)



	n数	値段が変更前と同じなら買いたいたい	値段が5%くらい高くても買いたいたい	値段が10%くらい高くても買いたいたい	値段が20%くらい高くても買いたいたい	値段に関係なく買いたくない
~10代	6	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%
20代	2	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30代	19	84.2%	5.3%	5.3%	5.3%	0.0%
40代	20	65.0%	30.0%	0.0%	0.0%	5.0%
50代	9	88.9%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%
60代	8	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%
70代~	18	61.1%	33.3%	0.0%	0.0%	5.6%
回答しない	1	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

アンケート分析のまとめ

プラスチックごみ問題への認知や関心は高まっており、課題は回収オペレーションやインセンティブである。今後はボランティア協力でどれだけ費用を抑制できるか、容器についてどの程度価格上昇が受容されるかの見極めが重要となる。



Executive Summary

1. 実証実験の背景と目的
2. 回収後の展開検査
3. 実証実験における参加者からの反応（アンケート分析結果）
- 4. 今回明らかになったこと及び今後の課題**

4. 今回明らかになったこと、及び今後の課題（1/2）

良かった点は回収テストを重ねるごとに回収量が増大し、良品（対象物）量、良品率も向上したこと。
また消費者がプラスチックごみ問題に高い意識を持つことがわかったこと。課題は異物（対象外物）混入の防止対策。

今回の実証実験では右記のことが明らかとなった。

- **回収テストを重ねることによる容器回収量の増大と良品量、良品率の向上**

回収テストを1回、2回、3回と回を重ねるごとに回収容器量が増大し、かつ良品量、良品率も合わせて改善していった。実証実験が市民に徐々に浸透していったものと考えられる。

- **回収物のケミカルリサイクルにおける良好な結果**

回収物をもとに行ったケミカルリサイクルの検証結果も良好であり、リサイクルは可能であった。

- **プラスチックごみ問題に対する消費者の高い意識と参加率**

プラスチックごみ問題への関心は高く、生態系への影響等、問題の内容についても相当程度理解が進んでいる。
また実際に第2回と第3回を合計すると、59.6%の人がプラスチックの回収に協力している。

- **異物混入の防止対策**

継続回収においては回収側が指定した容器以外に、異物が混入する可能性が高まり、分別の精度を向上させる必要がある。

特に弁当のフタのように、複数種類のプラスチックが混在する容器に関しては、特定種類のプラスチックに限ったリサイクルが難しく、アールプラスジャパンが目指す、混合プラスチックを処理可能な新技術によるリサイクルの稼働が期待される。

回収の観点で課題となったのは次の点である。

4. 今回明らかになったこと、及び今後の課題 (2/2)

また、回収オペレーション改善、回収インセンティブ付与も次の課題。
経済合理性のあるスキーム構築に向けても、コスト抑制、費用負担等の観点でさらなる検討が必要。

消費者の視点、特に行動変容という観点では次の点が課題である。

● 回収オペレーション改善

容器回収における課題としては、回収場所の自宅からの距離、保管スペース、家族がごみと間違えること、容器の乾燥等が挙げられている。回収場所としては、特にスーパー・コンビニが圧倒的に支持され、次いで公共施設となっている。今後、回収場所の地点数拡大、多様化、さらに頻度増大等が課題である。

● 回収インセンティブ付与

回収のインセンティブとしては、リサイクル結果の報告やポイント還元が上位に位置付けられており、今後リサイクル結果を迅速に伝える手段、ポイント付与や還元の仕組み等の整備を検討していく必要がある。

● 地域の方のボランティア参加機会の創出

消費者のうち、ボランティアへの協力意向があるのは5割から7割弱程度であり、今後どのような活動に参画してもらうのかについてさらなる検討が必要である。

● リサイクル容器への価格転嫁

リサイクル容器への変更に伴う値上げを受容するとの回答は約26%であったことから、今後、経済合理性確保の1つの方向性として、資源循環（リサイクル）にかかる費用を価格転嫁することも検討可能と考えられる。

継続的な仕組みとしていくためにも、経済合理性のあるスキームを構築していくことも重要である。

The end of the Document.